

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | 初級日本語教科書の文型意識   |
| <b>Author(s)</b> | 川口, さち子   |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学論叢,18(3) : 119-134   |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=77">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=77</a> |
| <b>Rights</b>    |   |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 初級日本語教科書の文型意識

イル・アル文型を例として

川 口 さち子

Sentence Pattern Consciousness in Elementary Japanese Textbooks  
With Special Reference to *iru* & *aru* sentence Patterns

Sachiko KAWAGUCHI

With special reference to the usage of *iru* and *aru* sentence patterns for the expression of the existence of animate and inanimate things in Japanese, this paper discusses where sentence pattern consciousness of language textbook authors appears; what learning information a textbook with clear sentence pattern consciousness gives their readers, what information a textbook lacking sentence pattern consciousness conveys; and what language teachers should do in order to combine sentence pattern consciousness with teaching communicative skills.

Keeping these communicative functions in mind, the author of this paper first categorizes *iru* and *aru* sentence patterns into three kinds, namely, SP (sentence pattern) [thing noun *ga* place noun *ni iru / aru*]; SP [thing noun *wa* place noun *ni iru / aru*]; and SP [place noun *niwa* thing noun *ga iru / aru*], and describes the meaning and function of each sentence pattern. Through the examination of the distribution of these patterns in text conversations and usage drills and the grammatical explanations of those three sentence patterns in ten different elementary Japanese textbooks, it becomes clear that textbooks without a clear sentence pattern consciousness cannot provide their users with any effective learning information. It is also maintained that textbooks without clear sentence pattern consciousness also fail to assist their users in learning if their sentence pattern consciousness is not supported by consciousness of the communicative functions of these patterns.

---

**Key words:** sentence pattern teaching, sentence pattern consciousness, communicative functions, elementary Japanese textbooks, sentence pattern with “*iru*” and “*aru*”

## 1. はじめに

第二言語あるいは外国語としての日本語教育において、すべての学習項目は最終的に学習者が自己の語りたいことを表現できるように教えられなければならない。つまり、学習が表現に結びつくような方法で教えられなければならない。この目的のために考案されたのが「文型」の概念である。「文型」とは、述語となる動詞や形容詞などの活用語が、どのような名詞句と格助詞で結ばれているかを示すものである<sup>i</sup>。例えば、「飾る」という動詞は「～ニ～ヲ飾ル」(部屋に花を飾る)と「～デ～ヲ飾ル」(花で髪を飾る)という、それぞれの名詞句と格助詞の組み合わせによって、「展示」と「装飾」の二つの意味の一方をより強く示すことができる。この「～ニ～ヲ飾ル」と「～デ～ヲ飾ル」が動詞「飾る」の意味を決定する「文型」なのである。非母語言語話者のための日本語教育においては、このように文型の単位で教えられる文法・語彙項目が数多く存在する。

教科書において学習項目がどのような文型として提示されているかは、その教科書が当該の学習項目によってどのような表現を学習者に身につけさせるかの意図を示しているものであり、それは同時に教科書の著者の言語観や言語教育観をうかがわせるものでもある。本論では、日本語教育の初級段階の、もっとも基礎的な文型の一つである「イル・アル文型」を例として、各種の日本語教科書で同文型がどのように扱われているかを検討し、教科書編集者にどのような文型意識があり、それをどのように表現教育に結びつけようとしているかを分析する。それによって、真に表現の教育を目指している教科書では、学習項目の文型をどのように扱うべきかを明らかにしたい。

## 2. イル・アル文型の意味と機能

ものごとの存在を表す文構造は、言語の中でももつとも基本的なものの一つである。日本語の場合は、存在するものが有情物であるか無情物であるかによって、それぞれ動詞をイルとアルで使い分ける<sup>ii</sup>が、どちらにせよ、存在するものを表す名詞(以下、モノ名詞 と総称)と存在の場所を表す名詞(以下、トコロ名詞 と総称)とが述語の動詞イル・アルに対する補語となる。日本語は、補語に係助詞のハをつけて提題化することができるため、イル・アルを動詞句とする文型は、次のような三つの形式になる<sup>iii</sup>。

モノ名詞 ガ トコロ名詞 ニ イル・アル  
 モノ名詞 ハ トコロ名詞 ニ イル・アル  
 トコロ名詞 ニハ モノ名詞 ガ イル・アル

次に、それぞれの文型の意味とそのコミュニケーション上の機能を記述する。

まず、文型「モノ名詞 ガ トコロ名詞 ニ イル・アル」は、ものの存在そのもの、言い換えればある場所にあるものが存在するという、まさにそのことを意味する、存在文型のもっとも典型的なものである。では、ものの存在そのものを表すということのコミュニケーション上の機能は何か。それは、そのものの存在に気づかせることであり、そのものに対してなんらかの意味で注意を喚起するということである。例えば、雨上がりの道を歩いている友人に対して、そのまま歩いていくと水溜りに足をつこんでしまうというような状況に注意を喚起して、水溜りをよけて通るようにさせたいと思えば、「ちょっと、ちょっと、そこに水溜りがあるよ」と呼びかけるだろう。また、外で遊んで帰ってきた子どもに対して母親が「テーブルの上にお菓子があるわよ」と言えば、子どもはその発話からおやつのあるかを知ることができるのである。この文型は、ものの存在が中心的な情報であるため、トコロ名詞は現れないこともある。「あ、ヘビがいる」などがその例であり、珍しいもの、避けるべきものの存在を知らせることだけがコミュニケーション上の目的になれば、とりあえず、トコロ名詞は言わなくてもよい。

次に、文型「モノ名詞 ハ トコロ名詞 ニ イル・アル」であるが、これは存在するものにハをつけて、これをトピックとして提出することで、そのものの存在する場所を明らかにするという意味を持つ。この場合、モノ名詞はすでに話し手と聞き手の共有する文脈で既出のものか、それまでは未出でも提題したとたんにトピックとして共有されうるものでなければならない。後者の場合に、もっとも普通に文型が現れるのは、肯定文ではなく、むしろ疑問文でものある場所が確認の対象となる場合、すなわちコミュニケーション上の機能としてはものの所在を問うという「情報求め」の機能が発揮される場合である。肯定文は、その疑問文に対する回答として現れることになる。デパートの案内所などで聞かれる客と案内係のあいだの会話、「すみません、家具売り場は何階にありますか」「(家具売り場は)7階にございます」というようなものが、この文型の典型的な使い方である。文型がものの存在そのものを表す文型であるために、疑問文になること(「そこに水溜りがありますか」「テーブルの上にお菓子がありますか」)がほとんどない<sup>iv</sup>の<sup>iv</sup>に比べ、文型はむしろ疑問文でこそコミュニケーション上の機能が発揮されるものなのである。

文型「トコロ名詞 ニハ モノ名詞 ガ イル・アル」は、文型のトコロ名詞が提題化されたもので、トピックとなっているある場所に特定のものが存在することを表す文型である。場所がトピックでそこにあるものが紹介されるという意味を持つならば、施設の説明や観光案内などの「情報与え」の機能が期待されるコミュニケーションに文型が使われるのは当然のことであり、また、そのような内容の「情報求め」の質問にもこの文型が現れる。具体的には、肯定文では「パリには、凱旋門やノートルダム寺院のような歴史的建造物が数多くある」、疑問文では「このホテルには、サウナがありますか」というような形で、それぞれ使われることになるわけである。

以上が存在を表すイル・アル文型の意味と機能であるが、イル・アル文型には存在のメタファー

として「所有」「行事」を表す場合がある。「所有」は、「ヒト名詞 ニハ モノ名詞 ガ アル」の形式になっており、「私には時間がある」「中村さんには妻子がある」のような例になる。「行事」は、「トコロ名詞 デ モノ名詞 ガ アル」の形式で「学校でPTAの集まりがある」「会社で忘年会がある」のように、特定の場所で特定の行為・作用が行われる意味を表す。ただし、本稿では、この「所有」「行事」のイル・アル文型は扱わない。

### 3. 各種教科書におけるイル・アル文型の扱い

前節でイル・アル文型の意味と用法を検討した。では、これらの意味や機能は実際の教科書でどのように扱われているのか、以下の10種類の教科書<sup>v</sup>で分析する。

1. 『日本語の初歩 *First Lessons in Japanese*』 長沼直兄 1952 開拓社
2. 『*Beginning Japanese*』 Eleanor Harz Jordan 1963 Yale University Press
3. 『日本語1』 国際学友会日本語学校 1977 財団法人国際学友会
4. 『*An Introduction to Modern Japanese*』 水谷修・水谷信子 1977 The Japan Times
5. 『新日本語の基礎』 海外技術者研修協会 1977 スリーエーネットワーク
6. 『日本語初歩』 国際交流基金 1981 凡人社
7. 『文化初級日本語』 文化外国語専門学校日本語科 1990 文化外国語専門学校
8. 『*Situational Functional Japanese*』 筑波ランゲージグループ 1991 凡人社
9. 『みんなの日本語初級』 スリーエーネットワーク編 1998 スリーエーネットワーク
10. 『*Japanese for Busy People The Kana Version*』 AJALT(国際日本語普及協会)1995 講談社インターナショナル

では、以下にこれらの教科書におけるイル・アル文型の扱い方を、一つずつ分析・確認していこう。

#### 3-1. 『日本語の初歩 *First Lessons in Japanese*』

言語文化研究所附属東京日本語学校の創設者、長沼直兄の『日本語の初歩 *First Lessons in Japanese*』は、戦後の日本語教科書の初期の代表的教科書である。各課の構成は、文型の提示と置き換え文、語彙、文法と構造説明、練習となっているが、原文はローマ字表記の短文の羅列で会話文はなく、またその文脈は提示されていない。存在文は、初出が10課で、数詞の学習とともに「机がひとつあります」のような形式の文が並んでいる。続いて16課では位置詞の学習とともにイル・アルが扱われ、「名刺は箱の中にあります」(漢字かな混じり文に変換。以下同)「お金はさいふの中にありますか」のような文が紹介される。次に、19課で「ここにいます」「田舎にあります」のような例文を使って、イル・アルの違いが説明されている。つまり、どの課においても学

習の焦点は数詞・位置名詞・イルとアルの相違などに置かれており、存在動詞イル・アルに関する表現についての文型への意識は感じられない。

### 3 - 2 . 『Beginning Japanese』

オーディオリンガル法を応用した日本語教科書の草分け的存在のもので、本文はローマ字表記である。存在文は6課で扱われており、本文が(a)から(g)までであるが、すべてが会話文(BASIC DIALOGUES FOR MEMORIZATION)である。本文会話(a)は以下のように提示されている。

**そこ(は)アメリカ大使館ですか。(漢字かな混じり文に変換。以下同)**

**いいえ、領事館ですよ。**

**大使館はどこですか。**

**東京にあります。**

**ここにはありません。**

「トコロ名詞 は モノ名詞 ですか」の形から入っているが、これは存在文ではなく「これは本です」のような同定文(の疑問文)である。しかし、3 - 1 . 『日本語の初歩 First Lessons in Japanese』と異なり、既習の「～は～です(か)」を使いながら会話の形で「(大使館は)東京にあります」を導き出し、文型 を提示している。口頭表現を重んじる立場から会話の形で文型を提出するという意識が見られる。

しかし、続く本文(b)は、会話の最初の文が「東京駅(は)どちらですか」と、再び同定文になっており、意味的には存在を表す文にはなっているが、イル・アル文型ではない。本文(c)も会話の最初が「あそこ(は)ホテルでしょうか」となっており、同じくイル・アル文型ではない。

一方、本文会話(d)は、次のとおりイルを使った存在文で、同じように会話の形で文型 を導入している。

**田中さんはいますか。(「いらっしゃいますか」と敬語形も提示されている)**

**いいえ、いません。(おりません)**

**どこにいますか。(どちらにいらっしゃいますか)**

**京都にいます。(おります)**

次の本文会話(e)は、文型 の例文である。

**このへんに電話はありませんか。**

**ありますよ。駅の前にも横にもありますよ。**

(後 略)

最初の文の形式は、文型 の「トコロ名詞 二ハ モノ名詞 ガ イル・アル」ではなく、「トコロ名詞 二 モノ名詞 ハ...」となっているが、これは動詞が「ありますか」ではなく否定形の「ありませんか」になっているせいである。もちろん、「このへんには電話はありませんか」

という形式でも文の形としては問題はなく、八の重複を避けたのであろうと思われる。

続く本文会話 (f) は文型 の存在文 (「この郵便局 (は) どこにありますか」), (g) は同定文 (「ちょっと伺いますが、帝国ホテル (は)、どこでしょうか」) になっている。

以上のように、この教科書では文型 は扱われているが、 は扱われていない。ただし、本文会話 (a)(d)(f) が文型 , 本文会話 (e) が文型 と、文型ごとに会話がまとめられているわけではないところから、文型 と の区別がどこまで意識的に行われていたかは、疑問が残る。事実、同課の GRAMMATICAL NOTES (pp.78-83) でも、文型の差異には一切触れておらず、そのあとの DRILLS (pp.83-91) のパターンプラクティスにも文型 の違いが意識されていると思われるような練習問題は見当たらない。本文・文法解説・練習問題と全体的に見て、文型 への文型意識はある (特に「モノ名詞 ハ トコロ名詞 ダ」との比較で) が、文型 への意識はないに等しく、したがってイル・アル文型が十分に意識化されていたとは言えないであろう。

### 3 - 3 . 『日本語 1』

これも、戦後初期の教科書で、本文の提示の仕方は、3 - 7 . 『日本語初歩』に似ている<sup>vi</sup>。3課でアルが、4課でイルが、それぞれ四つと三つ会話文のかたまりの中で扱われているが、その提示のしかたには問題がある。

まず、3課「ここに本があります」の先生と学生の間の会話は、次のようなやりとりで始まっている。

先生「そこに何がありますか。」

学生「ここに本があります。」

注 (iv) にも書いたが、まず「そこに何がありますか」という疑問文自体が不自然である。もし、文型 の疑問文になるなら「そこに何かがありますか」が自然であり、その答えは「はい、あります」か「いいえ、何もありません」のはずで、もし肯定の答えなら、それに続いて「何があるんですか」という質問が起こるだろう。もし、この本文のように、存在するものが何であるかを聞くのであれば、「そこにあるものは何ですか」と聞くほうが普通である。

一方、この会話を「そこには何がありますか」という質問で始めれば、これは「そこにあるものは何か」を聞いているのではなく、「そこにはどのようなものが見出せるか」を聞いていることになるので、文型 の疑問文であるということになる。こう考えれば、学生の答えである「ここに本があります」は「(ここには) 本があります」であると考えられ、その後の次のような展開も自然である。

先生「(ここには...筆者添付) 辞書もありますか。」(漢字のルビ割愛。以下同)

学生「はい、辞書もあります。」

先生「新聞もありますか。」

**学生「いいえ、ありません。」**

すなわち、教師が学生に図書閲覧室か学生寮のロビーの設備を尋ねている会話であると考えればよい。したがって、この教科書で指導する場合には、3課の最初の会話は最初の文の「そこに」と2番目の文の「そこに」にそれぞれ係助詞のハを加えた「そこには」「そこには」を使い、文型の例として扱うのが、文の形式と意味のズレを大きくしないで教える最良の方法である。同様に、「机の上に何がありますか」で始まる次の会話も、「いすのそばにかばんがありますか」で始まる3番目の会話も、文型として扱えばよい。

最後の会話のかたまりは、次のようなやりとりで始まりかつ終わっているので、文型の例を示したものと言えよう。

**先生「あなたがたの学校はどこにありますか。」**

**学生「わたしたちの学校は新宿にあります。」**

(中略)

**先生「映画館はどこにありますか。」**

**学生「映画館は駅の近くにいます。」**

しかし、この二つの文型の会話の間にある教師の質問は、またしても「学校の近くに何がありますか」となっており、文型であるべきものが不完全な形式になっている。

すなわち、この教科書の3課のアル文型は、文型主体の中に文型が挟まっていて、しかも文型は二八が二だけになっている不完全文型だということになる。

4課のイル文型も同じ問題を抱えており、最初のイルを含む文は1番目の会話の中にある、次のような、文型の不完全形式である。

**阿部「今、教室にだれがいますか。」**(漢字のルビ割愛。以下同)

**木村「田中さんと佐藤さんがいます。」**

そして、そのあとの、1番目の会話の最後の部分に文型が現れる。

**阿部「山田さんはどこにいますか。」**

**木村「山田さんは事務室にいます。」**

2番目の会話には、登場人物の阿部の質問として「図書室にだれがいますか」「池の中に何かいますか」という疑問文があり、典型的な肯定文の「～ニ～ガアル・イル」ではないが、文型の例文が出ている。一方、典型的な文型の例は、2番目の会話と3番目の会話の間にある短い説明文である。

**幼稚園の庭に子どもがおおぜいいます。男の子も女の子もいます。子供たちのそばに犬もいます。**

国際学友会日本語学校の『日本語1』は、このように文型がすべて揃っており、それぞれの文型もその基本的な意味のありかたに準じて配されているが、文型は係助詞ハを欠く不完全な



形式で導入されており、またこの三つの文型が機能ごとに使い分けられているとは言えない状態である。しかし、短文を羅列しただけの 3 - 1 . 『日本語の初歩 *First Lessons in Japanese*』や存在文と同定文が同じ意味の文型として扱われ、動詞述語のイル・アル文型に対する意識の薄い 3 - 2 . 『*Beginning Japanese*』から比べると、だいたいがイル・アル文型の文型意識が形作られているのが分かってくるような構成になっている。

### 3 - 4 . 『*An Introduction to Modern Japanese*』

分かりやすい英語による文法解説、アクセントやイントネーションなどの学習支援に特色のあるこの教科書は、日本語教育界では「IMJ」の略称で呼ばれているが、オーディオリンガル式のパターンプラクティスを短文のレベルから談話のレベルにまで広げ、本文会話も自然な流れになるように工夫された、画期的な教科書である。イル・アルが導入されるのが、第三課「どこにありますか」で、本文の Dialogue に次のように登場する。

A : あそこに喫茶店がありますね。(漢字のルビ割愛。以下同)

B : ええ。

A : そのとなりに しろいたてのものが ありますね。あれは なんですか。

B : 郵便局です。

A : ホテルはどこにありますか。

B : あの銀行のそばにあります。

以上のように、自然な会話の流れが意識されており、文型 「あそこに喫茶店がありますね」と文型 「ホテルはどこにありますか」「あの銀行のそばにあります」が、それぞれ文脈の中でどのように使われるかがきちんと示されている。Dialogue も、次のような同様の構成で、自然な文脈での文型 の使われ方が示されている。

A : あそこに男の人がいますね。(漢字のルビ割愛。以下同)

B : どこにいますか。

A : エレベーターのまえにいます。

B : ああ、そうですね。

(中 略)

A : 中村さんたちはどこにいますか。

B : 食堂の中にいます。

(後 略)

イル・アル文型 については、それぞれ、Explanation (文法・語彙説明 pp.21-26) で、「無情物のある場所での存在を表す基本的な表現 (筆者和訳)」「無情物の所在を聞く非常に一般的な表現 (同左)」<sup>vii</sup>として紹介されている。しかし、どちらの Dialogue にも文型 は入っておらず、文法説明

もされていない。唯一以下の Reading Comprehension (p.30) の下線部に見られる文型 の例は、しかし、実は文型 なのである。

**銀行の前にしろいたてものがあります。病院です。病院のとなりは喫茶店です。**

**喫茶店のなかに人がたくさんいます。田中さんもいます。田中さんのおくさんもいます。田中さんたちのそばにあかいテーブルがあります。テーブルのうえにはコーヒーがあります。**(下線筆者)

この文章は、眼前の光景を描写して、そこに何があるかをどんどん紹介しているものなので、下線部分は「**テーブルのうえに**」でも問題はない<sup>viii</sup>。係助詞のハは、最後の文なので締めくくりについたというところであろう。もし、下線部のあとに、コーヒーのほかにテーブルに載っているものをもっと紹介し、お茶の時間のテーブルの華やかな感じを描写することが意図された文章である場合には、下線部が文型 の例となるのである。

実は、この課における文型 は Structure Drill (p.28) 中にある。それは、「**窓のそば**(原文ローマ字表記...筆者注)」という語句から「**窓のそばに何がありますか**」という短文を作る拡大練習のパターンプラクティスである。すでに3 - 3までに見たように、これは文型 「**窓のそばには何がありますか**」の不完全形式であり、練習の際には八のついた形式で練習させるほうがよいであろう。もちろん、窓のそばにあるものがどうしてそんなに気になるのかという文脈を用意しなければならないが。

以上、『IMJ』は、は自然な文脈における使い方を示すことができたが、文型 については意識が及ばなかったため、他の教科書と同様不完全な形式を提示してしまった。また、実は、文型 は本文でみごとに使い方を示したものの、Usage Drill 中には「ものの存在そのものを示す」ことの機能を生かしたドリルが用意されていないのは残念である。ただし、文型 についての文型意識は明確であると考えられ、したがって、三つの文型意識が明瞭でない3 - 3『日本語1』とは違い、イルとアルをわざわざ別の課に分けることなく、存在表現の世界を全体としてまとめて示すことができているのは、進歩と言えよう。

### 3 - 5 . 『新日本語の基礎 』

ももとは、技術研修生のための教科書であるが、各課の文型が非常に分かりやすく提示されており、学習項目が把握しやすいことから、『みんなの日本語』ができるまでは、日本語学校で最も広く使われていた教科書である。

各課の構成は、「文型」および「例文」の提示、「会話」「練習A」「練習B」「練習C」「問題」となっている。イル・アル文型は、第10課にあり、その「文型」は次のように、文型 (例文1・2) と (例文3・4) が提示されているが、 は提示されていないことが分かる。

1 . 事務所に田中さんがいます。(漢字のルビ割愛。以下同)

2. ロビーにテレビがあります。

3. ラオさんは部屋にいます。

4. 本は机の上にあります。

「会話」は、「道を聞く」という設定で、次のようになっている。

ラオ：あのう、近くに郵便局がありますか。

木村：ええ、ありますよ。駅の前です。

ラオ：駅の前？

木村：わかりませんか。じゃ、地図を書きます。駅はここです。

ラオ：はい。

木村：駅の前にデパートがあります。郵便局はこの隣です。

(後略)

一見、文型 だけのようだが、「ラオ」の最初の発話は「この近くには郵便局がありますか」という文型 の不完全な形式である。また、「木村」の「駅はここです」「郵便局はこの隣です」を、文型 を「～ハ～デス」の形式で置き換えたものと考えれば、この短い会話の中にイル・アル文型のすべてが入っていることになる。しかし、付属の教師用指導参考書を見てもそこまでの文型意識の徹底は見られず、せつかくの文脈を生かしきれていないのが残念である。

同じ問題が「練習A」にも見られる。この練習では、例文1・2・3が文型 の、4・5が文型 の例として疑問詞も含めた形で提示されており、この両文型を比較するには分かり安い構成になっているのだが、例文1・2の疑問詞の例「教室にだれがいますか」「あそこに何がありますか」は、文としては不自然であり、それぞれ「教室には...」「あそこには...」と文型 になるが、「教室にいるのはだれですか」「あそこにあるのは何ですか」のような形式になるべきである。ここでも、文型 を疑問文にする際に起きる問題について文型の意味の把握が不徹底である。「練習B」の2も、「机の上に何がありますか。……パスポートがあります」のようなQ & A練習が5題続き、こういう質問形式が不自然なものであることへの意識の欠落が再確認される<sup>ix</sup>。

一方、「練習C」は、短い会話の置き換え練習になっているが、練習1が文型 の、2・3が の使い方を、それぞれが簡潔に示したものになっている。教師のほうでしっかりした文型意識を持って導入すれば、それぞれの文型の意味が明確に教えられると考えられる。ただ、ここでも、文型 は提示されていない。

### 3 - 6 . 『日本語初歩』

国際交流基金の教科書として、一時期世界中の日本語教育の現場で使われていた『日本語初歩』は、明確なイル・アル文型の文型意識を感じる教科書の一つである。存在文を扱うのは、第3課「ここにでんわがあります」と第4課「あそこに人がいます」であり、前者がアル、後者がイルを

導入しているが、文型意識の明確なのは、第3課のほうである。

第3課は、枠や線による外見の区切りはないものの、最初の「**そこになにがありますか／ここにでんわがあります**」で始まる部分が文型 ①の、続く「**このへやにはなにがありますか**」が文型 ②の、そして次のページの「**れいぞうこはどこにありますか**」が文型 ③のタイプの文型であり、3-7『新文化初級』とともにイル・アル文型の3種類を区別して揃えた、文型意識のしっかりした教科書である。ただ、残念なのは、文のコミュニケーション上の機能に対する意識が低く、例文として挙げている文が文脈上不自然なものが多い。例えば、文型 ③を示す箇所の「**れいぞうこはどこにありますか**」の答えとしての「**れいぞうこはだいいどころにあります**」は、「れいぞうこは」を繰り返す必要がないという点を除いて問題はないとしても、続く「**やさいはどこにありますか／やさいはれいぞうこの中にあります**」「**くだものはどこにありますか／くだものもれいぞうこの中にあります**」は、冷蔵庫の所在が分かったあとの発話としては不適切で、本来ならば「野菜は冷蔵庫に入っていますか／はい、入っていますよ」「果物は？／果物も入っていますよ」というあたりが自然な発話のはずである。

『日本語初歩』は、本文の会話が不自然であるばかりでなく、練習も単なる変形練習や不自然な「問いと答え」で占められている。例えば、問題5の「**あそこにとなたのかさとどなたのかさがありますか**」というような文は「あそこにあるかさはどなたのですか」と言うほうが自然だし、またこの問いではイル・アル文型の練習にはならないのではないだろうか。文型意識が明確なだけに、それを有意味なコミュニケーションの練習に結び付けられていないのは残念なことである。

### 3-7.『文化初級』

今回取り上げた教科書の中で3-6『日本語初歩』とともに、もっともイル・アル文型の文型意識が明確なものの一つであり、かつ応用としての練習も整っている。第5課が存在文を扱う箇所であるが、その中を3つに分け、それぞれ「**冷蔵庫の中にビールとおさしみがあります**」「**デパートはどこにありますか**」「**この階にお手洗いはありますか**」と、異なる文型を紹介している。ただ、「本文1」が文型 ①、「本文2」が文型 ②に、それぞれきちんと対応しているのに対し、「本文3」は文型 ③に対応していない。もし、対応させるならば「**この階には、お手洗いはありますか**」とすべきだったろうし、それでも同じデパートでトイレを探すという文脈で意味のある文として導入できたはずである。「本文3」の「**この階にお手洗いはありますか**」という文は、文型としては文型 ③の「～ハ～ニイル・アルカ」になってしまい、「本文2」との差別化ができない。しかも、「本文3」では、男性客が「**あ、この階にお手洗いはありますか**」と聞き、デパートの女子店員が「**いいえ、ありません。お手洗いは3階です**」と答えたのを踏まえて、同じ本文の次の部分では、3階に行ったこの男性客が「**すみません。お手洗いはどこですか**」と聞いているので、もし最初の質問が「**あ、この階にはお手洗いはありますか**」だったとすれば、二つの、よく似ているが意味

の異なる文型の違いを「本文3」中で意識的に指導・学習することができたかもしれないのである。しかし、この矛盾があるとしても、この教科書がイル・アル文型の三つの類型に対して明確な文型意識を感じさせることは否定できない。応用練習も、それぞれの文型の機能に見合ったものになっていて、コミュニケーション教育への意識が高いと言えよう。

### 3 - 8 . 『Situational Functional Japanese』

『SFJ』の略称で呼ばれることの多いこの教科書は、コミュニケーション・アプローチを全面的に取り入れたはじめての初級日本語教科書で、どんな場面でことばが使われるのかが意識されており、会話は自然な流れになっている。教科書は、本冊である「ノート」と練習帳の「ドリル」の2冊に分かれており、さらにそれが、それぞれ1・2・3の3レベルある、ボリュームのある教科書である。存在文は、第4課の「場所を聞く」という課で扱われている。

「ノート」のほうの構成は、課の最初に学習項目が提示され、特に会話ではどんなストラテジーが使われるのかも提示されている。たとえば、どのように会話を始めるか、非情物/有情物の所在をどのように聞くか、ことばが分からないときにどのように繰り返してもらおうかなどのストラテジーが提示されている。次に「Model Conversation」、会話の内容を書きことばとしてまとめた「Report」、新出単語および表現一覧の「New Words and Expressions」、Grammar Notes」、会話の説明・ストラテジーの説明である「Conversation Notes」そして、4課が終わったところの「まとめ」では、「は」と「が」の違いの簡単な説明や格助詞省略などにも言及している。なお、説明は、すべて英語である。

「ドリル」のほうでは、新出単語と関連語彙がまず、提示され、そのあとに構造ドリルがあり、いわゆるオーディオリンガルの置き換え練習がついている。そのあと、ストラテジーに沿った、練習と会話のドリルが行われている。

「ノート」のモデル会話では、(1)と(2)で文型 および が扱われているが、会話を自然にするため、若干文型が見えにくくなっている。会話(1)と(2)のイル・アル文型の見られる部分は、つぎのようになっている。

#### (1)「 - 宿舎で - 」

(前 略)

ブラウン：あの、せんたく機はどこでしょうか。

女子学生：せんたく機。

ブラウン：ええ。場所、わかりますか。

女子学生：せんたく機なら、4階のあっち側にありますよ。

ブラウン：4階ですか。

女子学生：ええ。そっちに階段がありますから。

ブラウン：はい。

(後 略)

(2)「 - キャンパスで - 」

(前 略)

シャルマ：このへんに、電話ありますか。

田 中：電話ね。

シャルマ：ええ。

田 中：ああ、食堂の自動販売機のとなりにありますよ。

シャルマ：じどう…。

田 中：自動販売機。ほら、あのコーラとかジュースとかの。

シャルマ：ああ、わかりました。そのとなりですね。

田 中：そう。

(後 略)

会話(1)では文型 と文型 が取り上げられており、どちらも自然な使い方の、よい例になっている。ただし、文型 の2番目の例は「**せんたく機なら、4階のあっち側にありますよ**」と、提題の助詞が八でなくナラになっており、この形式が文型 のバリエーションであることを教師のほうで押さえておかなければならない。ただ、このナラの使い方は「Grammar Notes」で触れられているのは、親切である。会話(2)では、文型 の「**ああ、食堂の自動販売機のとなりにありますよ**」のほかに、「**そのとなりですね**」を「電話はそのとりにあるんですね」と同義の表現であることを認識しておく必要があるのに加え、「**このへんに、電話ありますか**」のように格助詞ガが落ちた「無助詞」形式の文型 をどう扱う<sup>x</sup>か、教師のほうで考えなければならない。こちらのほうは提題のナラのような丁寧な説明がないので、指導上困難が予想される。つまり、『SFJ』では、会話に関しては文型 としか出てきておらず、その形式も典型的なそれではないので、扱う教師は注意が必要である。

文型 はどうなっているかという点、この第4課の会話文についての「レポート」に、「**ブラウンさんはイギリスの学生です。ブラウンさんの部屋は宿舎の2階です。2階にはせんたく機がありません。せんたく機は4階にあります**」「**シャルマさんは図書館の前にいます。図書館のうしろに食堂があります。食堂の中に自動販売機があります。電話はそのとりにあります。自動販売機にはコーラやジュースなどがありますから、近くに学生がたくさんいます**」(ともに下線筆者)にそれぞれ1例ずつ見られる。この「レポート」には、文型 もともに出てきているので、教え方によってはイル・アル文型のすべてのタイプを比較しながら紹介することができる。

つまり、『SFJ』のイル・アル文型は、文型 について「会話」「レポート」の中でそれぞれ対比して教えられる機会が見出せるため、自然な会話文やレポート形式の書きことばのおかげでイ

ル・アル文型の対照指導が可能だが、文法解説や練習で文型としてこの三つを意識的に取り出してはならず、コミュニケーションな体裁のわりに文型意識は高くない。また、「ドリル」パートのほうでは、「Structure Drills」の3番のように、「**いすの上**」というキーワードから「**Q：いすの上に何がありますか。A：かばんがあります**」という会話文を作るといった、他のそれまでの教科書と大差ない不自然な文の生成を強いる練習を含んでおり、コミュニケーション・アプローチの不徹底が感じられる。

### 3 - 9 . 『みんなの日本語初級 』

『みんなの日本語初級 』では、イル・アル文型が10課で扱われており、この教科書の前身である、『新日本語の基礎』と扱っているものは、同じである。

ただ、例文の出し方が、『新日本語の基礎』では、例文1では、「**ロビーにだれがいますか。…リーさんがいます。**」(漢字のルビ割愛。以下同)のように不自然な会話例だったのに対し、『みんなの日本語初級』では、同じ例文1が「**あそこに男の人がいますね。あの人はだれですか。…IMCの松本さんです。**」のように、より文脈を意識し、自然な会話となっている。

ただし、例文2・3・4は、それぞれ「この近くに電話がありますか」「庭に誰がいますか」「箱の中に何がありますか」と、旧態依然であるのは、文型の意味・機能についての意識の不徹底の現れであり、残念である。

### 3 - 10 . 『Japanese for Busy People』

この教科書は、丁寧な英語の対訳と解説がついたビジネスピープル向け初の初級教科書である。存在文は、イル・アル混在で8課と9課で扱われている。8課の文法解説「Grammar 」には、「Existence of People and Things」として、次のようにイル・アル文型の三つのタイプがすべて紹介されており、文型意識の高いことをうかがわせる。

- 1 . place に noun が あります / います
- 2 . noun は place に あります / います
- 3 . place には noun が あります / います

しかし、文型 の用例は、本文には含まれておらず、練習項目に文型 は入っていない。しかも、8課の「Exercises」の は、A「**いっかいに なにが ありますか**」、B「**はこのなかに なにが ありますか**」、C「**だいどころに だれが いますか**」と、他の文型意識の低い教科書にも見られるのと、同じ不自然な文の生成練習を行っている。第9課も本文会話が「このちかくにゆうびんきょくがありますか」という、例の不思議な質問文で始まっており、「Exercises」の には、A「**テーブルの うえに りんごが いくつ ありますか**」、B「**にわに おとこのひとが なんにん いますか**」、C「**この ちかくに タクシーのりばが ありますか**」と、8課と同様の練習が載っている。

る。

つまり、この教科書は、せっかくははっきりしたイル・アルの文型意識を持ちながら、それがコミュニケーションの上でどういう意味・機能を担うものなのか、まったく理解できていないように見えるのである。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿は、存在を表すイル・アル文型を例として、教科書のどこに文型意識が表れるか、文型意識がある教科書とない教科書では学習者に与える学習情報がどのように異なるか、また文型意識をコミュニケーション教育につなげるには何に注意すればいいのかなどを論じた。まず、第1章で筆者の問題意識を述べたあと、第2章ではイル・アル文型を、そのコミュニケーション機能も視野に入れた上で、文型「モノ名詞 ガ トコロ名詞 ニ イル・アル」、文型「モノ名詞 ハ トコロ名詞 ニ イル・アル」、文型「トコロ名詞 ニハ モノ名詞 ガ イル・アル」の3種類に分類し、それぞれの意味と機能を記述した。第3章では、その分類を基に10種の教科書におけるイル・アル文型の取り扱いを分析した。その結果、文型意識のない教科書はコミュニケーションの教育に有効な学習情報を学習者に提供できないこと、文型意識があってもその機能に意識が及んでいないときは、やはり有効な学習情報を与えられないことが判明した。また、教科書の編著者が文型とその機能に目が行き届くようになるのは、日本語教育の教授法理念の中心が、いわゆる「文型積み上げ式」やオーディオ・リンガル・メソッドからコミュニカティブ・アプローチに移っていく時期とおおむね一致していることも分かった。しかし、この移行はいまだ徹底しておらず、文型意識と機能的な教授法が一致するには、教授者側に更なる意識化が必要であろうということも示唆されたのであった。

今後は、文型と機能の関係を更にいろいろな文法項目について検討し、コミュニケーション上有効な文型指導の方法論を探求していくつもりである。

#### 注

- i 「日本語教育においては、どのような動詞（群）がどのような格助詞を伴った名詞句との組み合わせをとるかを知っておくことは、重要である。」（『新版日本語教育事典』p.103）
- ii 「有情物＝生物」「無情物＝無生物」とは限らない。魚屋の店先に並んで売られている魚は「生物」であってもアルでその存在を表現するし、自分たちを監視するように、あるいは行く手に立ちふさがるように駐車している車の存在は「あんなとこにパトカーがいるぜ」とイルで表す。
- iii イル・アルによる存在文をこの三つのパターンとして明示的に分類している指導参考書は少なく、富田（1989）は本稿の文型 と不完全な文型、国際交流基金日本語国際センター（1993）は文型 と、最新の教師用指導解説書である高見沢他（2004）でさえ文型 と を挙げるにとどまっている。文法辞典として名高い森田（1991）は文型 と の区別に意識が行っておらず、文型辞典であるグループ・ジャマシイ（1998）にはイル・アルが立項されていない。これは、これらの文献の著者が、イル・アル文型



の意味と形態を記述することに終始して、文型の持つコミュニケーション機能に意識が届いていないためであろうと思われる。

- iv 疑問文にするならば、不定代名詞とともに「そこにだれがいますか」のような文にしなければならない。疑問詞を使った「そこにだれがいますか」も不自然で、「そこにいるのはだれですか」が一般的である。係助詞八を加え、「そこにはだれがいますか」と、文型の形式にしてしまえば、問題はない。
- v 1945年から1995年までの50年間に発行された初級教科書の中から代表的なものを選んだ。
- vi 『日本語初歩』の编者である鈴木忍は、戦後間もない1954年に、坂田雪子とともに国際学友会から『NI-HONGO NO HANASIKATA』を出しており、そのため学友会の教科書と『日本語初歩』は多くの共通点が見られる。
- vii どちらも述語が arimasu の場合について最初に説明されている (pp.22-23) ため、「無常物 (inanimate objects)」だけの記述になっているが、imasu についての説明 (pp.24-25) の中でも、明示的ではないが同じことが分かるように書かれている。
- viii 逆に、同文章中の「喫茶店の中に」「田中さんたちのそばに」のどれかにも八はつけられるし、また、すべてに八をつけても文章としては不自然ではない。このような、談話の流れをまとめていく八の談話展開上の機能は、イル・アルを含む、存在や所在に関する表現とは別のレベルのもので、本稿では文型として取り上げることはしない。ただ、日本語教育を行うものは、一見同じように見える文の形が異なる機能を持つものであるということをはっきりと認識しておかなければならない。そうであれば、初級のこの段階では、この読解のための文章からは下線部の八を抜いて指導するほうが無難であろう。
- ix 「教室にだれがいますか」「机の上に何がありますか」などの質問は、質問者がすでに答えを知っており、その上で回答者の知識や理解を試すために行う質問である場合は、それほど不自然ではない。しかし、これは、いわゆる display question であり、コミュニケーションギャップがないので、本当の会話ではない。『新日本語の基礎』のような、広く使われている教科書における、この疑問詞を含む文型文の不自然さの放任は、日本語教育の一部に「会話を本当のコミュニケーション活動として見る」ことの意識が欠落していることを如実に示すものである。
- x 「このへんに電話がありますか」は不自然だし、自然なものとしてとらえると display question になってしまうという議論を (注ix) で行ったが、実は「このへんに電話ありますか」という文は、display question でない、本当の会話として十分に自然である。存在文を考察する場合には、「電話がある？」と同時に「電話ある？」という無助詞型の質問形式も議論の対象に入れなければならないのだが、この形式の日本語教育における扱いはまだ定まっていない。筆者は、これを「助詞の脱落」ではなく「無助詞」として扱うべきだと考える。この文法現象に関しては、黒崎 (2002)、尾上 (2003) を参照。

#### 参考文献

- 1 尾上圭介 (2003) 『日本語の意味と文法』東京堂出版
- 2 グループジャマシー (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 3 黒崎佐企子 (2002) 「日本語教育における無助詞の扱い」『早稲田日本語教育研究 2』早稲田大学大学院日本語教育研究所
- 4 国際交流基金 日本語国際センター (1993) 『日本語教授法実践の手引』国際交流基金 日本語国際センター
- 5 高見澤孟監修 (2004) 『新・はじめての日本語教育 1』アスク
- 6 富田隆行 (1991) 『文法の基礎知識とその教え方』凡人社
- 7 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 8 森田良行 (1991) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 9 山口明穂 (2004) 『日本語の論理 言葉に現れる思想』大修館書店